

東日本支部だより

2013年11月10日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

**** 定例研究会のお知らせ ****

今後の例会予定

下記の日程で例会を予定しております。ホームページには要旨も掲載しておりますので、併せてご参照ください。ふるってのご参加、お待ちしております。

第 74 回 12 月 7 日 (土) 於：東京藝術大学

特別企画、研究発表。

*詳細は下記をご覧ください。

第 75 回 2 月 1 日 (土) 於：東京藝術大学

講演 (片山杜秀氏)、研究発表ほか。

*詳細は、1 月下旬にお知らせいたします。

第 76 回 3 月中旬予定

卒・修論発表。

◆東日本支部第 74 回定例研究会

時 2013 年 12 月 7 日 (土) 午後 1 時～4 時 30 分

所 東京藝術大学音楽学部第 1 ホール (ホール館)

(JR 上野駅公園口または地下鉄千代田線根津駅下車)

○特別企画

「近代文人琵琶音楽から近現代国家プロ琵琶演奏家琵琶音楽までの伝承と発展」

お話・演奏 王晓東 (中国琵琶奏者)

*王晓東氏 ご紹介

中国北京市の音楽家の家系に生まれ、幼少より中国琵琶を学ぶ。中国音楽学院卒業。東京藝術大学修士課程修了。2008 年より隔年で東京藝術大学において中国琵琶の授業を担当。

○研究発表

1. 「ミャンマー古典歌謡とのサウン・ガウの旋律技法
—ソーハンとティーハンについての考察—」

発表者 ス・ザ・ザ・テ・イ (東京藝術大学大学院博士課程)

2. 「モリンホールによるオルティン・ドーの伴奏手法
—後追い、同時進行、先回しの手法に注目して—」

発表者 策力格尔 (東京学芸大学連合大学院博士課程)

出演者 [オルティン・ドー] イラナ

[モリンホール] バトエルデネ (世界馬頭琴協会)

司会 丸山洋司

(東京藝術大学演奏芸術センター専門研究員)

* * * * *

★定例研究会発表募集（2月例会）

東日本支部では会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております。発表を希望される方は、発表種別（研究発表・報告等）、発表題目、要旨（800字以内）、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先（住所、電話、Fax、E-mail）を明記の上、本誌末尾記載の東日本支部事務局あて、お申し込み下さい。発表希望は11月20日必着にてお願いいたします。なお、発表希望を提出後1週間経ても東日本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

* * * * * 定例研究会の報告 * * * * *

◆東日本支部第72回定例研究会

時 2013年6月1日（土）午後2時～4時

所 洗足学園大学

司会 澤田篤子（洗足学園音楽大学）

○博士論文発表

1. 音楽取調掛から東京音楽学校開校期にかけての伝習・教育の実際—文書・楽譜・証言をもとに—

丸山彩（東京芸術大学大学院）

（発表要旨）

本研究は、音楽取調掛及び開校期の東京音楽学校の伝習・教育の内容を研究対象とした歴史研究である。それらを明らかにするために、文書、楽譜、証言という3つ

の形態の史料を扱った。音楽取調掛では、唱歌教育の導入に向けた教員養成に重きがおかれていたのに対し、東京音楽学校では、師範部と専修部を設置し、音楽教員と音楽家の養成に着手することとなった。しかし、当時の社会状況から見ても、音楽家になることは難しく、東京音楽学校の卒業生の多くは音楽教員として地方の中等学校に赴任している。これは、地方の側からも、東京音楽学校卒業生を教員として求めていたためでもあり、東京音楽学校は地方における音楽教育の発展にも寄与したのであった。本研究は、指導者側から語られる傾向にあった教育史を、伝習生・生徒側の史料を用いて、受け手の視点に立って捉えることを試みたものである。

第1章「明治16年頃の音楽取調掛における伝習内容」では、伝習生の伊藤よね（京都府女学校教員）が遺した筆写譜である「譜面」から、明治16（1883）年頃の音楽取調掛における伝習の実際を明らかにした。第2章「音楽取調掛伝習生による唱歌教育の展開—明治10年代末期から同20年代前半の京都を事例に—」では、第1章を踏まえて、音楽取調掛で伝習を受けた教員が、地方の唱歌教育導入に際してどのような役割を果たしたのか、京都を事例にとり明らかにした。第3章「明治10年代後半の幼児教育における唱歌導入の試み」では、伊藤が遺した「譜面」と同様の筆写譜である「幼稚園譜面」の内容を扱った。第4章「東京音楽学校開校期における教育内容と地方における音楽教育の展開—明治20年代の京都を事例に—」では、明治20年代前半の東京音楽学校における教育内容を扱った。そして、同校の卒業生による地方における音楽教育の実態を示した。

今回は、第4章を中心に発表をした。まず、明治22年度の東京音楽学校の公文書から東京音楽学校開校期における教育内容を検討した。そして、その教育を受けた生徒である、専修部でヴァイオリンを専攻した岩原愛を

取り上げた。岩原が筆写した楽譜や所有した輸入版楽譜と東京音楽学校所蔵楽譜を比較することで、初期の専門教育の具体的内容が見えてきた。さらに、岩原の遺族からの聞き取りを通して、明治期に音楽の専門教育を受けた女性にとっての音楽とは何かを考察した。

(傍聴記・平高典子)

丸山彩氏の研究は、音楽取調掛から東京音楽学校初期にかけてどのような伝習・教育がなされたか、またそこで伝授された内容がいかに地方の音楽教育の場で展開されていったかについて、実際に教育を受けた側に焦点をあて、東京音楽学校や遺族のもとに残る具体的な史料を豊富に用いて明らかにしようとするものである。坂本麻美子氏の先行研究を除くと、この分野はまだあまり開拓されておらず、その意味でも氏の研究は貴重であり、意義あるものである。今回の発表では、音楽取調掛や東京音楽学校で学び、京都の高等女学校などで音楽を教えた伊藤よねと岩原愛を取り上げて、楽譜などの遺品や遺族の証言などにより、彼らが受けた教育内容の実際に迫った。発表後のフロアからの、なぜ岩原愛に注目したのか、という質問に対しては、受け手側から見た音楽教育を調べるため、京都の行政文書の中に履歴書が残っていた人物の子孫を捜すという作業の中で、岩原に行きついた、という説明があった。

2. 黒川能の伝承に関する民族誌的研究

柴田真希 (東京芸術大学大学院)

(発表要旨)

黒川能は国指定の重要無形民俗文化財で、地域内の鎮守である春日神社の上座下座の2座に分かれた氏子たち、

約100名によって伝えられている神事能である。本論文は、黒川能の多様な伝承活動の実態と、その背景を明らかにすることを目的とした。論文は2部から成る。第1部では、近現代を対象時期として、黒川外部との相互交渉の中で展開されてきた黒川能の多様な伝承活動の様子について論じた。第2部では、多様な伝承活動を支える組織と芸の習得過程、そして使用される謡本について論じた。本発表では、黒川能の多様な伝承活動を、当事者たちによる「黒川能らしさ」の模索過程と読み替え、第1部からは演技の場における例として蠟燭能の創出を、第2部からは演技の実践における例として黒川能謡本の作成の背景を取り上げた。

第1部で扱った蠟燭能は毎年2月に行われる当事者主体のイベントである。演出方法に一貫目蠟燭の使用や神社の舞台を使った演能など、黒川能を代表する演能空間である王祇祭を想起させるような「黒川能らしさ」が散見される。すなわち、蠟燭能とは、蠟燭能開始以前に真壁仁による著述やメディアを通じて社会的に流通していた「黒川能らしさ」を求める外部からの要求に、当事者たちが応える形で生み出された場なのである。

第2部で扱った黒川能謡本は1960年代の末より黒川内部で作成された謡本で、現在では原則的に役者全員が使用している。本論文では、観世流と黒川能の『羅生門』の謡本文を比較する事で、黒川能謡本が作成される事になった理由について明らかにした。その結果、観世流の『羅生門』の謡本文は元禄以後、現行の謡本文に近い形に変化を遂げた一方、黒川能の『羅生門』の謡本文は、元禄以前の形を残している事が明らかになった。つまり、黒川では五流の変化に伴って実践を変化させるのではなく、謡本を変化させたのである。これは、演技の実践における「黒川能らしさ」を当事者たちが模索した例と位置づけることができる。

本発表では、以上の事例を当事者たちが「黒川能らしさ」を模索した例として取り上げた。黒川能の多様な伝承活動は、外部からの視線にさらされる中で、当事者たちがその時々状況に柔軟に対応し変容してきた結果と言える。本論文は、民俗芸能の伝承が外部との相互交渉の中で成立するものであるという事を、黒川能を一事例として実証したものである。

(傍聴記・奥山けい子)

柴田氏は6章から成る博士論文のうち、第3、4章を中心に報告された。民俗芸能であり、農民芸術であるという評価を外部から得てきた黒川能が、伝承活動の要としてはそのどちらでもなく「黒川能らしさの追求」であるという主旨を、柴田氏は明確に述べ、それを2月の「蠟燭能」の創始および演出、ならびに黒川独自の謡本作成の過程の分析によって論証した。視野は広範囲で「民族誌的研究」という論文題目にふさわしい。

この叙述を支えたものの一つは、参与観察法の採用である。祭りの裏方の仕事を含め、長年にわたってフィールドワークを続ける柴田氏の姿は、黒川の伝承者の共感を得て、しだいに彼らにとけ込み、精細な調査を可能にした。今後の課題は、外部との交渉に関する音楽レベルでの研究とのことである。いっそうの成果が期待される。

3. 日本音階論の基礎的研究

宮内基弥 (東京芸術大学大学院)

(発表要旨)

日本の5音階で、半音を含まないものを陽音階といい、半音を含むものを陰音階という。これは、上原六四郎が雰囲気の違いでそのような分類を行ったことに始ま

る。沖縄に見られる、主音への短2度上行導音を持つ音階は、雰囲気の違いと言う点で、私はこの分類に適用しない。

陽音階を次の五つに分類する。第1陽音階(ドレファソラ) 第2陽音階(レファソラド) 第3陽音階(ファソラドレ) 第4陽音階(ソラドレファ) 第5陽音階(ラドレファソ)。この分類は、現在その存在が確立されていない第5陽音階が最後になるように分類した。民謡研究者達は、民謡の主要な陽音階として第4陽音階を提出したが、小泉はそれを第2陽音階陽音階と同一視し、その存在を否定した。これに対し大塚は、第2陽音階は近世邦楽には適用できないとして、小泉の民謡音階は第2陽音階ではなく第4陽音階とすべきであるとした。彼女も小泉同様に、第2陽音階を第4陽音階と同一視して前者の存在を否定していることになる。小泉と大塚の提出した理論は非常に重要なものであるが、そこには曖昧な点も多い。

この論文の目的は、代表的な日本音階論の論者達がどうしてそのような音階を考えたのかをさぐること、および、小泉と大塚の理論に修正を加え発展させること、これらのことを通して、日本の音階について新しい見方を提示すること、である。

主音の位置を変えずに音階を変えることを、一般に modal interchange という。私の考える音階論の着想は、次の二つの事実から引き出された。都節音階は主音の位置が明確であること、および、民謡や近世邦楽において、第2陽音階は都節音階と modal interchange することは無いが、第1陽音階と第4陽音階は都節音階と modal interchange するということである。

この発表では、主に、都節音階と第4陽音階との間の modal interchange について、実例をあげながら説明した。このことから少なくとも、小泉が第2陽音階と第4

陽音階を同一視したことは誤りであったことがわかる。

この発表では、時間の関係で、日本音階論の諸研究家の考察や小泉や大塚の理論についての考察を取り上げることができなかった。

また、第2陽音階と第4陽音階の区別の問題について、第2陽音階が本当に存在するのか、という点も含め、現段階では意見を保留中である。

(傍聴記・加納マリ)

日本伝統音楽の研究にとって基本的な音楽理論である日本音階論はこれまでもさまざまな研究者が取り上げており、博士論文でどのような研究がなされたのか、今回の発表を興味深く拝聴した。しかし、発表当日のレジュメは発表原稿であり、博士論文の全体像をつかむことができなかったのはとても残念に思う。この論文の目的は「日本音階論の論者たちがどうしてそのような音階を考えたかをさぐること、小泉の提出した諸概念を定義し直すこと、第2陽音階と第4陽音階の区別を理論的に示すこと、これらのことを通して、日本の音階について新しい見方を提示すること」とあったが、研究の成果としてこれらの結果が導かれたのかどうか、今回の発表からはわかりにくいものだった。今回の発表で、論文の目的のどれか一つに焦点を当てるのなら、そのような流れもあったと思う。発表の方法にもっと工夫があっても良かったのではないだろうか。別の形での発表に期待したい。

◆東日本支部第73回定例研究会

時 2013年7月6日(土) 午後2時~4時20分

所 東京芸術大学音楽学部 5-401室(5号館4階)

司会 野川 美穂子(東京芸術大学)

○調査報告

1. レバノンにおけるアラブ古典音楽の保存と伝承 —2013年初春現地調査から—

酒井絵美(東京芸術大学大学院)

(発表要旨)

本発表は、2013年2月中旬~3月上旬に滞在したレバノンの首都ベイルート近郊での調査に基づく報告である。アラブ古典音楽の保存及び伝承方法についてアーカイブセンター、総合大学の音楽学部という二つの場での事例を紹介する。尚、今回調査対象となった音楽は主にカイロ・アレppoを中心として発展しベイルートでも受容されているもので、両施設の関係者の多くはキリスト教マロン派を信仰している。

Arab Music Archiving & Research(以下 AMAR)は伝統的なアラブ音楽の保存と普及を目的として2009年に作られた施設で、主にナフダの時代と呼ばれる1903年から1930年代のカイロでの録音を約7000本(時間数にして6000時間程度)保管している。AMARでは現在これらのデジタル化及び公開を進めており、例えば一昨年には20世紀初頭のエジプト人歌手ユーセフ・アルマンヤラーウィーのCD(全十巻)とブックレットのコレクションを出版した。これは1905年から1910年のSP録音をCD化したもので、ウンム・クルスームに代表される「新古典」音楽以前の音楽様式や詩型を納めている例としても大変重要である。また、アラブ首長国連邦の機関と協力しアーカイブの一部をpodcastで配信するなど、先進的な取り組みを続けている。

続いて、発表者がアラブ・ヴァイオリンやアンサンブルの授業を受講し、ワードやナーイ、歌唱の授業を聴講したアントニン大学高等音楽院 Institut Supérieur de Musique(以下 ISM)を紹介する。ISMは1996年に設

立され、学士・修士の学位を授与する権限をもつ。2005年からは、アラブ・ヴァイオリニストのニダー・アブー・ムラードが院長を務めている。アラブ古典音楽部門では、彼の復興主義的な考えに基づき、乾いたような古い音色を好み旋律の中での音程の揺れ動きを重んじるなど、ナフダの時代やそれ以前からの伝統を再現しようと試みている。また、教習法は口頭伝承的であり、初心者向けのレッスンでは楽譜を使用する教師もいるがその楽譜は右から左へと記されるものが大多数で、これはマロン派の音楽の伝統に則った記譜法である。その他ジャーナルの発行を通して音楽学の研究成果を国内外に発信するなど、自分たちの伝統を理論化する姿勢もみられる。

両施設とも、復興という意識を根底にした保存を目指し、最新の技術や教養を駆使して効率よく伝達しているところに特徴があり、短期間ではあるが一定の成果を出しているといえる。

(傍聴記・飯野りさ)

2013年春に中東の小国レバノンを訪れた酒井絵美氏の発表は、首都ベイルート近郊に位置する二つの研究教育機関に関する説明を中心に行われた。20世紀初頭のエジプト、カイロで録音されたレコードなどを大量に所蔵し研究する前者と、この伝統を重視する近代的教育機関の後者がベイルートにあるという説明は、カイロを中心とした古典の伝統のレバノンにおける位置付けに思いをめぐらせざるをえない。国境線は様々な歴史的経緯で線引きされ文化の境界線でないことは重々承知しているものの、この地域の重層的な歴史・文化の展開が今日、レバノンの音楽関係者の自己認識にいかにか影響しているのかを垣間見せてくれる稀な機会であった。この調査で酒井氏はアラブ音楽のためのヴァイオリンの実技指導も受けており、これについていま一步踏み込んだ観察報告が

あったら、教育現場の様子をより詳しくある種の臨場感をもって来場者に伝えることができただろう。

○特別企画

2. 長唄の復曲

—榎茂都流に残された三味線譜による—

[出演] 長唄： 稀音家義丸、羽山裕

三味線： 杵屋佐之義、杵家七可佐

[解説] 配川 美加 (東京芸術大学)

(発表要旨)

平成18年10月、日本舞踊(上方舞)の榎茂都流に残された資料の中から、伝承が途絶えていた長唄の三味線譜が数点発見された。三味線譜は義太夫節の朱を応用したもので、現在、この三味線譜に基づく復曲が長唄唄方の稀音家義丸氏と長唄三味線方の杵屋佐之義氏により進んでいる。ただし、三味線譜は音高・リズム・速度などを必ずしも正確に伝えているとは限らず、唄の譜も入っていない。今回演奏するのはそのうち《梓巫女》と《玉藻前》で、この2曲は、文政2年(1819)9月、江戸中村座で三代目中村歌右衛門が初演した九変化舞踊《御名残押絵交張》の5曲目と9曲目に演奏された曲である。本企画では、榎茂都流の三味線譜の特徴、《梓巫女》と《玉藻前》の曲の内容などを解説し、楽譜を如何にして解読し、三味線部分、及び唄の節を復曲したのかを実演入りで明らかにした上で、この2曲を演奏する。なお、2曲とも今回は復曲後、公の場での初めての演奏となる。

(傍聴記・加納マリ)

長唄は江戸時代以降多くの作品が作られ、演奏の記録や正本などは残っているが、現在、伝承されていない作品も多い。そうした伝承の途絶えた曲の再興や演奏の機会の少ない稀曲の演奏に努めている稀音家義丸師と杵屋佐之義師による長唄の復曲の演奏と配川氏の解説という今回の例会は非常に充実した内容だった。7年前に日本舞踊の榎茂都流に残されていた資料の中から発見された三味線譜をもとに、3曲が復曲され、そのうちの2曲《梓巫女》と《玉藻前》が今回、復曲後初めて演奏された。2曲とも、文政2(1819)年9月、江戸中村座で上演された九変化舞踊である。榎茂都流に現在残されている三味線譜は長唄だけでなく、地歌、義太夫節、常磐津節、小唄など多岐にわたるといい、長唄の三味線譜は義太夫節の「いろは譜」に近いことが示された。榎茂都流の三味線譜を解説する方法を佐之義師が説明されたが、苦労されたのは間の取り方とのこと。三味線の楽譜がジャンルにより、またその中でも流派によってさまざまな記譜法が使用されていることを考えると、復曲作業は大変なものと思われる。毎回、復曲の際に義丸師によって作られる手書きの楽譜が今回も添えられ、詳しいレジメとわかりやすい解説付きの演奏は非常に興味深いものだった。例会に今回のような特別企画が登場するのはとても有意義であり、また、こうした企画を願いたい。

* * * * *

会員の声

◆レクチャーコンサートのご案内

新しいパースペクティブによる 日本伝統音楽シリーズ

IV Lecture/concert "A comparison of string plucking"

「撥弦の比較文化論」

・2014年2月6日(木) 19時開演

・会場: コンサートサロンパウゼ (カワイ表参道)

・話(日英2言語): 山口修

・出演者: 中村鶴城(鶴田流琵琶)

亀山香能/長瀬淑子/樋口千清代(山田流箏・三弦)

・主催 特定非営利活動法人 日本音楽国際交流会

(山口修)

会員の声 投稿募集

1. 次号締切: 2014年2月10日 (3月初旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

学会本部事務所(郵送、Faxまたはメール)

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル 307号

Fax: 03-3832-5152、 E-mail: tog.higashi@gmail.com

3. 字数と書式: 25字×8行以内(投稿者名を明記)

4. 内容: 会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

*原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきます。ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

編集後記

今号は6月例会の博士論文発表と7月例会の発表を中心にお届けします。個人的に発表を聴きに行くことができなかったのですが、こうしてみると時代も地域もさまざまな音楽文化がテーマに取り上げられていて興味深く読みました。この11月号は、初夏の6月の例会の報告から来る2月の例会の発表募集まで含み、半期の活動内容にかかっています。こうして定例研究会を開催できるのも発表者あって聴く人があってこそ、どちらにも感謝しつつ、今後とも活発な議論が続くことを願います。(K)

発行：一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部

編集：野川美穂子、尾高暁子、茂手木潔子、

金光真理子、福田千絵、山下正美

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com
